

延養亭

江戸時代（1603～1867 年）、延養亭は大名が後楽園を訪れた際に滞在する中心的な建物でした。第二次世界大戦末期の 1945 年に空襲で当初の建物が焼失し、現在の建物は江戸時代から伝わる歴史的な文書と図面をもとに 1960 年に再建されたものです。

現在の建物に使用されている木材やその他の材料は、奈良県など日本各地から取り寄せたものです。部屋は畳敷きで、建物の 2 面には大きく引き戸である障子が設えられており、障子を開けると庭園の景観がその枠内に捕らえられます。大名は床の間の前に座ることが多く、その場所は庭園を眺める最良の位置になります。延養亭は廊下で鶴鳴館と栄唱の間につながっており、後者は後楽園能舞台に隣接しています。庭園の正門付近にあるこの建物は、1 年のうち特定の時期にだけ一般公開されます。

延養亭は障子を開け放ったときにできる枠のなかに庭園の景観を収め、それを建物内から眺められる造りになっています。延養亭はこの独特の景観を与える位置関係になるように建造されたもので、平安と平穏をもたらす空間になっています。延養亭からの眺めそのものが、岡山県が制定した建築規制によって保護されており、庭園の外に建物を建てることは制限されています。この景観保護規制は先駆的なもので、日本の他の地域に同様の取り組みを促すことになりました。1940 年に岡山県はこの景観を正式に風致地区に指定し、これは何世紀も前に大名が味わった眺望を将来世代の庭園への来園者のために保護するものです。

延養亭からの眺めは、庭園の広大な芝生、沢の池、唯心山を捕えることができ、さらに遠景として操山が収まります。この眺望は「借りた景色」を意味する「借景」とみなされています。庭園の敷地外の風景を構成要素として取り入れ、庭園の奥行きを深めるものです。9 月下旬から 10 月にかけて中秋の名月（秋の最初の満月）が昇ると、延養亭からはこの月を山の上に眺めることができます。延養亭の内外から右手に花葉の池と二色が岡の林が見えます。建物の東側の外には茂み

の背後に半ば隠れるように三角形の岩があり、その場所では延養亭内からと同じ眺めが得られることを告知らせています。

延養亭に付随して 4 畳半の茶室があり、臨二軒と呼ばれています。当初の建物は 1945 年の空襲で延養亭と共に焼失しましたが、後に復元されました。この復元した茶室のために、大正（1912～1926 年）・昭和（1926～1989 年）期の代表的画家である日本画家池田遙邨（1895－1988）が、当初の建物の天井に描かれていた竜を描き直しました。遙邨は後樂園能舞台の背景画も描きました。竜の絵は延養亭が一般公開されている時期にだけ鑑賞できます。